

はじめに

情報メディアセンター長 龍 昌治

インターネットをはじめ、昨今の情報技術や通信技術の発達や普及は、目を見張るばかりです。家庭へのパソコン普及率は8割を超え、ADSLや光ファイバーなどによるブロードバンドも多くの家庭で利用されています。

高性能のパソコンとブロードバンドを背景に、利用されるコンテンツも音声や動画などのマルチメディアへと拡大しています。携帯音楽プレーヤーでダウンロードした音声コンテンツを楽しんだり、英会話の勉強をしたりすることも、ごく普通のことになっています。今まで家庭の情報窓口であったテレビに代わって、インターネット放送でスポーツ中継を楽しみ、DVDに録画をする人たちも、決して珍しくはありません。

一方で、ブログやソーシャルネットワーキングという個人からの情報発信も、多くの人たちに利用され、毎日、膨大な情報が生まれ、伝達・交換されています。これら大量の情報から目的の情報を探し出す検索技術や、地図情報と組み合わせて表現するインタラクティブ技術は、私たちに新たなWeb利用方法を提示しています。

これらを総称したWeb2.0というキーワードが注目されています。Web2.0は、知の共有技術として、個人レベルだけではなく、ビジネスにおける強力なコミュニケーションツールとしても、大きな可能性を秘めています。

大学における教育研究活動においても、ワードプロセッサや表計算などの基礎的な情報処理技術はもちろん、これらの新しい技術を利用する取り組みが始まっています。Webを利用した教育訓練システム（Web Based Training）を利用した教育や、そのためのコースウェアコンテンツの開発や利用も行われています。キャンパスブログやSNS、インターネット電話などの利用も増えていくことでしょう。これらの新技術とともに、セキュリティや著作権などの情報倫理の必要性は、ますます増しているといえましょう。

情報メディアセンターが中心となって整備してきたネットワークや各種サーバシステム、e-learningなどのLMS（Learning Management System）は、教育研究情報環境のインフラです。整ったインフラを活用した教育研究活動を展開するとともに、その成果を本誌に投稿いただき、知の共有拠点となるようご協力をお願いいたします。